

セルトー, ミシェル・ド 1987『日常実践のポイエティック』山田登世子訳 国文社。
リーペレス ファビオ 2020『ストレジャーの人類学——移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店。
Kromidas, M. 2016. *City Kids: Transforming Racial Baggage*. Rutgers University Press.

費孝通著 西澤治彦訳
『郷土中国』

東京, 風響社, 2019年
272頁, 2,000円 (+税)

川瀬 由高*

2014年10月、評者は大連で乗ったタクシーで少し変わった経験をした。その日、評者の宿泊先に迎えにきたタクシーは寄り道ばかりして、指定した目的地になかなか到着しなかったのだ。このタクシーは評者の友人Dさんに手配してもらったもので、運転手(Aとする)はDの知人であるとのことだった。道中、運転手Aは「友人に渡すものがある」と言って、積み荷を彼の友人(Bとする)に渡すために寄り道をした。さらにその後、運転中に携帯電話に連絡が入ると、Aは再び途中で車を止めて、こんどは女性(Cとする)を車に乗せた。大連には土地勘がなくよく分からなかったのだが、評者の目的地の方向にCの目的地があったようだ。Cが降りてしばらくしてから、ようやく評者は目的地にたどり着いた。

自分が利用しているはずのタクシーなのに、なぜ、見ず知らずの人物が入れ替わり立ち代わり現れては車を止めるのか。中国で出くわすこのような現象を理解する上でのキーワードとなるのが、本書において提起された「差序格局 (*chaxugeju*)」という概念である。

本書は、費孝通(1910-2005)の著書『郷土中国(*Xiangtu Zhongguo*)』の全訳本である。同著は1948年に初版(上海: 観察社)が、1985年に再版(北京: 生活・読書・新知三聯書店)が出版された¹⁾。本翻訳書は前者を底本としつつも、再版に加えられた序文も訳出されており、また誤植等の修正箇所もそれぞれ熟慮の上で反映されている(pp. 7-8, 240-9)。

原著『郷土中国』については、『民族学研究』においてもすでに書評[佐々木 1987]があり、『文化人類学

文献事典』にも優れた紹介[横山 2004]がある。また、本書の「訳者まえがき」、「訳者解題」においても丁寧な解説がなされている。そこで本書評では、屋上屋を架すことは極力避け、とくに中国研究を専門としない人類学者が本書を読む際のガイドになるよう、若干の解説を試みたい。

まず、本翻訳書刊行の意義について述べておきたい。著者の費孝通は中国を代表する社会学者・社会人類学者であり、彼の研究をめぐって、そして彼自身についても膨大な研究蓄積がある。日本の人類学者の間でも、初期の代表作であり、マリノフスキーが序文を寄せた民族誌『中国の農民生活』[Fei 1939]や、晩年の『中華民族の多元一体構造』[費編 2008 (1989)]は広く知られている。だが、彼の中期の代表作であり、しばしば「中国社会を知るための名著」と目されてきた『郷土中国』については、中国研究者の間でのみ言及されるにとどまってきたように思われる。その要因の1つは、日本語訳の存在が十分に知られてこなかったことだろう²⁾。

本書は、日本語で読める『郷土中国』の決定版となったと評価できる。『郷土中国』は、全体としては軽いタッチで書かれており読みやすい本ではあるものの、個々の議論には奥深さがあり、原文の細かなニュアンスを正確につかみ取るのは難しい本でもあった。経典が大量に引用されていること、当時の社会状況や社会学・人類学の動向に関する背景知識が必要なこと、そして何よりも、中国に暮らす人びとの生活感覚を貫く論理とでも言うべきものが描かれているからである。既存の邦訳の解釈の誤りについても丁寧に確認した上で成された本書の高水準の訳業は、費孝通の議論を再評価するための道を切り拓いた。

翻訳書としての本書の特色は、詳細な訳注にある。訳者の西澤治彦は、中国民族誌学の優れた入門書でも知られる人類学者である[e.g. 曾ほか編 1995; 西澤 1999; 瀬川・西澤編 2006; 西澤・河合編 2017]。本書における訳注は、原文の解釈や訳字等の指摘のほか、中国のフォークタームや学説史上の重要事項についての解説にまで及んでおり、本書を初学者(および非人類学者)に開かれたものとしている。それゆえ、本書は中国語/日本語を学ぶ学生/留学生への研究指導の際の便利な1冊としても、広く活用することができるだろう³⁾。

さて、本書のタイトルである『郷土中国』とは、「郷土性(田舎的な性質)」をもった中国社会という意味である(p.31)。ここには、中国の基層社会を成しているのは農村社会であるという認識が反映されている。すなわち、本書において費孝通は、土地に根差した暮

*江戸川大学 email: ychuanlai@gmail.com

らしを送ってきた農民たちの社会（郷土社会）において育まれてきたものだという見立ての上で、中国人社会に見られる人間関係や社会秩序、政治秩序のあり方について議論をしているのである。本書は、「郷土社会」としての中国人社会の構造的特徴について探究した理論書であるとひとまず言える。

ただし、この議論の枠組みはまた、中国社会が直面する問題を見極めることで、未来を展望するという意思に貫かれたものでもあった。訳者の西澤が端的に述べるように、本書は「中国社会の近代化への道筋」を提示しようとしたものであり（p.9）、社会問題の原因あるいは近代化の阻害要因を明らかにするという問題意識のもとで、「郷土社会」の分析は展開されていたのである。この意味で本書は、費孝通の「学以致用（学問を社会問題の解決のために用いる）」という研究姿勢 [cf. 川瀬 2013: 167-8] が反映された、同時代中国との格闘の記録でもある。

『郷土中国』はすでに古典としての地位を確立しており、中国研究では研究領域を超えて、言語を超えて頻繁に言及されてきた書物である。これまでも様々な読解と応用がなされてきたが [cf. 川瀬 2019: 序章]、本書の刊行を機に、日本でも再評価の動きが進むだろう。ただし、本書は単なる中国社会論の古典としてのみ位置づけるべきものではない。評者の理解では、本書の議論の枠組みは過去に属するものであるものの、本書で費孝通が提起した独自の概念は、最も現代的な人類学的思考と探究でありつづけている。それが、冒頭でも言及した「差序格局」である。

この概念は、「差序 (*chaxu*)」と「格局 (*geju*)」を組み合わせた費孝通の造語であり、国際的に最も有名な中国語概念の1つとなっていると言えるが、英語にも日本語にもうまく馴染まない用語である（それぞれの語義の詳細については、本書の訳者解題 (pp.225-31) や佐々木衛 [2019] による分析を参照のこと）。本書では第4章章題のとおり「差序的な構造配置」と噛み砕かれているが、日本ではそのまま差序格局と表記することが定着しているので、本稿でもそれを踏襲する（なお、原文の「格局」は、評者なりの言葉でいえば、「構造パターン」あるいは「汎時的 (*panchronic*) な構造」といったニュアンスである）。

差序格局については本書の第4章から第6章において議論されている。ここで費孝通が述べているのは、西洋と中国とでは基層的社会構造が全く異なるということである。彼はそれを、「団体格局」と「差序格局」の対比で説明している。すなわち、前者においては個人 (*individual*) の集合体はあたかも「束ねられた柴 (たきぎ)」のように、境界も成員資格も明瞭な「団体」

となるのに対し、後者においては、それはあたかも「水面上の波紋」のようなもので、境界も曖昧模糊としたものだというのである。

「己 (自己)」が中心にあるため、石を水中に投げ入れた時のように、他人との「関係」^{グアンシー}⁴⁾ で生まれる社会関係は、団体的な構造配置の中の一員が皆一つの平面上にあるのと異なり、水面の波紋の如く一輪一輪と広がり、外に行くほど遠くなり、外にいくほど薄くなる。ここにおいて、我々は中国における社会構造の基本的な特性に行きあたるのである (p.70)。

中国においては、各個人 (*differential self*) は常にそれぞれが自らの社会的な影響によって生み出した関係性の広がりを中心におき (*egocentrism*)、その範囲は、時と場合に応じて伸縮する。このような西洋と中国の「集団-個人関係」の対照性を、費孝通は、公共領域の捉え方、家族や親族関係のあり方の差異から説明している。

以上が、差序格局論の概要である。この議論は今から70年以上も前になされたものではあるが、西洋由来の概念に依らずに、現地の人びとによって生きられた関係性のあり方を理解し記述するという近年の人類学の動向に照らしても、今なお示唆に富む。さらに言えば、費孝通の非集団論は、単に人間集合の動態性を述べただけのものではない。「水面の波紋」という卓越した比喻は、個々の場面ごとの人間集合を俯瞰すると同時に、各個人からの見え方の違いまでを示唆する。すなわち、その時その場所における人間集合を俎上に載せると同時に、その場に居合わせた各個人はおのおのの視座から、自己を起点とした他者とのネットワークとして、その人間集合をそれぞれ経験していることをも焦点化したものと言える [cf. 川瀬 2019]。集合 (*assemblage*) の捉え方の問題や方法論的集団主義/個人主義の議論の上でも、有益な知見が得られるだろう。

差序格局論に関してはこのほかにも様々な評価と読み方が可能であると思われる。その際に1つ留意すべきなのは、差序格局論は、(低い流動性に特徴づけられた)「郷土社会」という枠組みに縛られる必要はないという点である。そもそも、伝統的な中国農村社会も移動の視点抜きに語ることは不可能であったし [e.g. 西澤 1996]、また、流動性の高い今日の中国社会においても、差序格局に基づくような事象が見られるからである。

本書評冒頭のエピソードを改めて見ていただきたい。

乗客を乗せたタクシーが、勝手に寄り道をしたり別の客を乗せたりする。評者はこれに驚き、寄り道には不満を抱き、相乗りには気まずさを感じた訳であるが、AもBもCも、ごく自然なことと見なし行動していた。タクシー運転手Aから見た関係性を考えると、第1にA-D-評者、第2にA-B、第3にA-Cの関係性があり、Aを中心とした同心円において、友人であるBとCは第1層に、友人の友人である評者は第2層に位置する。こう考えると、先に乗車していたはずの評者が「邪険にされた」のはむしろ道理かもしれない。差序格局の世界においては、タクシーという物質的な空間の境界も（先客の乗車により）閉じてしまうわけではなく、また、運転/乗車中の各個人たちは「皆一つの平面上に」いたのではなかったという訳である。

このエピソード自体は、差序格局論とは異なる視点からの解釈も可能かもしれない。また、読者諸氏の中には、ご自身の（中国以外の）フィールドでも、これと似たような経験をした方がいるかもしれない。もしそうであるならば、それは、差序格局の発想が中国以外のフィールドにおいても応用しうることを示唆すると同時に、また他地域の事例から差序格局論をさらに深化させうることを示すものである。

評者自身はこれまで、中東の「非境界の世界」を生きる人びと〔堀内・西尾編 2015〕や、東アフリカで「その日暮らし」の生活を送る人びと〔小川 2016〕の姿に、中国のそれと似たような感触を得てきた。本書の刊行を機に、差序格局論という中国民族誌学の理論的資源が広く人類学者一般に認識され、議論の輪がさらに広がっていくことを期待したい。

注

- 1) 訳者も言うように (p.30, 訳注3)、初版が出版されたのは1948年4月である。費孝通自身が書いた再版の「序言」や英訳書〔Fei 1992〕などでも1947年との誤記があり、注意が必要である〔cf. 瞿見 2020〕。
- 2) 全訳として、鶴間和幸らによる日本語訳〔費 2001a〕と、蕭紅燕による日本語訳〔費 2001b, 2001c, 2002, 2003〕がある。
- 3) たとえば、大学院受験を控えた中国からの留学生（研究生）に本書と原書の併読を勧めるならば、日本語学習と中国社会理解の点で得るところが大きいはずである。なお、原文の一部解釈については、橋本秀美〔2020〕による書評が参考になる。
- 4) 意味としては大差ないものの、原文（初版p.26）は「関係」ではなく「聯係（つながり）」であった。よってここは、「己（自己）」を起点に、あたかも石

を水中に投げ入れた時のように他人と繋がっていくという社会関係のあり方は……」くらいに解すると良いだろう。この箇所は原文がややこしく逐語訳が難しい。評者自身は、蕭紅燕による大胆な省略を含んだ翻訳〔費 2001c : 181〕を読んで初めて、差序格局の意味を理解できた〔cf. 川瀬 2019 : 18 ; 佐々木 2019 : 392〕。

参考文献

- 小川さやか 2016 『「その日暮らし」の人類学——もう一つの資本主義経済』 光文社。
- 川瀬由高 2013 「費孝通の学問的背景——複数の機能主義に就いて」『知性と創造——日中学者の思考』 4 : 166-88。
- 2019 『共同体なき社会の韻律——中国南京市郊外農村における「非境界の集合」の民族誌』 弘文堂。
- 佐々木衛 1987 書評「費孝通著『郷土中国』」『民族学研究』 52 (1) : 84-6。
- 2019 「費孝通「差序格局」(『郷土中国』) 精読の記録」韓敏編『家族・民族・国家——東アジアの人類学的アプローチ』 風響社 pp.371-406。
- 瀬川昌久・西澤治彦編 2006 『中国文化人類学リーディングス』 風響社。
- 曾士才・瀬川昌久・西澤治彦編 1995 『暮らしがわかるアジア読本 中国』 河出書房新社。
- 西澤治彦 1996 「村を出る人・残る人、村に戻る人・戻らぬ人——漢族の移動に関する諸問題」 可児弘明編『僑郷華南——華僑・華人研究の現在』 行路社 pp. 1-27。
- 1999 『中国映画の文化人類学』 風響社。
- 西澤治彦・河合洋尚編 2017 『フィールドワーク——中国という現場、人類学という実践』 風響社。
- 橋本秀美 2020 書評「費孝通著 西澤治彦訳『郷土中国』」『青山国際政経論集』 104 : 91-105。
- 費孝通 2001a 『郷土中国』(調査研究報告 No.49) 鶴間和幸ほか訳 学習院大学東洋文化研究所。
- 2001b 「郷土社会の中国」蕭紅燕訳『土佐地域文化』 3 : 208-30。
- 2001c 「郷土社会の中国(その二)」蕭紅燕訳『土佐地域文化』 4 : 177-200。
- 2002 「郷土社会の中国(その三)」蕭紅燕訳『土佐地域文化』 5 : 252-8。
- 2003 「翻訳 郷土社会の中国」蕭紅燕訳『高知論叢』 76 : 357-404。
- 費孝通編 2008 (1989) 『中華民族の多元一体構造』 西澤治彦ほか訳 風響社。(費孝通編『中華民族多元一

体格局』中央民族学院出版社.)

堀内正樹・西尾哲夫編 2015『〈断〉と〈続〉の中東
——非境界的世界を遊ぶ』悠書館.

横山廣子 2004「費孝通『郷土中国』」小松和彦ほか編
『文化人類学文献事典』弘文堂 pp.576-7.

Fei, Hisao-tung 1939. *Peasant Life in China: A Field
Study of Country Life in the Yangtze Valley*. Routledge

and Kegan Paul.

Fei, Xiaotong 1992. *From the Soil: The Foundations of
Chinese Society* (trans) Gary G. Hamilton & Zheng
Wang. University of California Press.

瞿見 2020「帳前猶憶護燈人：費孝通《郷土中國》出
版考」『中華読書報』2020年6月3日：14.